



Title	アンデルセン博物館による「アンデルセン式学習法」 開発の現状と課題：アンデルセン独自の芸術的技法 から普遍的で応用可能な学習法へ
Author(s)	久木田, 奈穂
Citation	IDUN -北欧研究-. 2025, 25, p. 143-156
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100757
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

[研究ノート]

アンデルセン博物館による 「アンデルセン式学習法」開発の現状と課題 アンデルセン独自の芸術的技法から普遍的で応用可能な学習法へ

久木田奈穂

1. はじめに

アンデルセンをいかに読むのかという課題は、現代社会のグローバル化、情報化等のめまぐるしい変化を受けて近年ますます複雑化している。特に、アンデルセンを現代の教育に用いることをめぐっては、デンマークを中心としてこれまでに様々な媒体で特集が組まれており、教育界のみならずアンデルセン研究界の注目をも集めている¹。

なかでも本稿が着目するのは、それらの流れを汲みながら近年に独自の学習法の開発と実践を試みる、アンデルセン博物館の取り組みである。その学習法は、「アンデルセン式学習法」(den Andersenske metode)²と呼称される。同博物館は、自身の教育関連部門においてこの学習法に基づいた学習プログラムを提供しており、日々「アンデルセン式学習法」を洗練させている。

本稿は、そのような「アンデルセン式学習法」を包括的に検討するための基礎として重要である、「アンデルセン式学習法」のアンデルセン教育研究における位置づけや、同学習法の理論的背景、実践の概要等を整理し、この取り組みの現状や課題に関する暫定的な考察を行うものである。

2. アンデルセン教育の論点－アンデルセンを現代の教育に用いること

“Undervise med Andersen”「アンデルセンを用いて教える」という語は、アンデルセン教育研究において近年よく使われる表現である³。アンデルセンを教育に

¹ Center for Børnelitteratur (2004), Forum for World Literature Studies (2018), Aktualitet (2019)など。なお、Forum for World Literature Studies (2018)のうちアンデルセンに焦点を当てているのは、1ページから107ページにかけて掲載されている、デンマークの研究者による投稿論文に限られる。

² この語がしばしば“den Andersenske (undervisnings)metode”と表現されることをふまえると、「アンデルセン式教授法」と訳すのが適切だと思われるかもしれない。しかし、後述する「子どもたちとの共創」のようなアンデルセン博物館の理念をふまえると、「教授」という教育者の視点に立った言葉よりも、学習者の主体性が明らかとなる「学習」という語を使用する方がより適切であると考えられる。

³ 「アンデルセンを用いて教える」がそのまま特集号の副題となっている Aktualitet (2020)のほか、Mogensen (2019)にも似た趣旨の記述がある。

取り入れること全体をさす用語であり、特に、アンデルセンを現代の教育に活用するという意味合いで用いられる。この“Undervise med Andersen”という語の“med”という前置詞に着目すると、アンデルセンを教育における協力者とみなした「アンデルセンと一緒に」や「アンデルセンと協力して」というような意味にも、アンデルセンを教材としてみなした「アンデルセン（とその技法から得られる知見を）用いて」とも捉えられる。いずれにせよ、現代の多様な選択肢の中で19世紀デンマークの特定の作家の作品を取り上げることの意義や、現代の若者に対する効果的な働きかけの方法が問い直されている。

一方で、これらの大きな問題意識を共有しながらも、個々の研究のテーマや手法は様々である。アンデルセン自身やアンデルセン作品に着目するもの、特定の作品を読み解き教える方法を検討するもの、アンデルセンと文学カノンという観点⁴、別の教科や研究分野と結びつけるものなど枚挙にいとまがない。

3. アンデルセン博物館による「アンデルセン式学習法」とは何か

本稿の主題であるアンデルセン博物館による「アンデルセン式学習法」は、今なお開発と実践が積み重ねられているものであり、その全体像の把握は難しい。

「アンデルセン式学習法」の理解を妨げるもののひとつは、関連するデンマーク語表現の用いられ方である。ここで一度、それらの用語を整理したうえで、本稿にて用いる日本語の訳語とその示すものを整理しておく。「アンデルセンを教育に用いること」にまつわる論文やその他の刊行物において用いられる表現は、いくつかの例外や細かなバリエーションはあるものの以下の2点に分類することができる。

表1 「アンデルセン式学習法」をめぐる用語⁵

	原語	本稿にて用いる訳語	意味するところ
①	H.C. Andersens Metode	アンデルセンの芸術技法	アンデルセンが、自身の芸術において用いた、特徴的な技法そのものを指す。 (例)口述性、語り手の位置で遊ぶ、答えのないおとぎ話
②	Den Andersenske Metode	「アンデルセン式学習法」	①をもとに開発することができる学習法。特にアンデルセン博物館が自ら開発し実践している、特定の学習法を指していることが多い。

①と②の用語には“metode”という語が共通して用いられているものの、両者は

⁴ デンマークの初等・中等教育に対して定められたデンマーク文学カノン (Dansk litteraturskanon) において、必修とされる14人の作家のひとりがアンデルセンであることから、アンデルセンのデンマークにおける文化的・教育学的重要性が読み取れるとされる。

⁵ これらの用語の使われ方を参照し、筆者が情報を整理しまとめた。

厳密に言えば異なる意味合いを有している。⑧の“Den Andersenske Metode”が直訳すると「アンデルセン風の（接尾辞 -sk）メソッド」となるのに対し、⑨の“H.C. Andersens Metode”は「アンデルセンの（所有格を示す -s）メソッド」となる。このことと呼応するように、関連する文献では語が使い分けられている。

「アンデルセン式学習法」を開発・実践するアンデルセン博物館の教育部門“学びの宇宙”（*Læringsuniverset*）では、自らの提供する ⑧「アンデルセン式学習法」の理論的・方法論的根拠として、⑨アンデルセンの芸術的技法を挙げている。つまり、アンデルセン作品が有する芸術的特徴を理論化し、その他の理論や実践による知見⁶とともに開発の基盤としたものが、アンデルセン博物館の「アンデルセン式学習法」なのである。「アンデルセン式学習法」はアンデルセンの芸術的技法から出発したものでありながら、子どもを独立した個人として尊重する理念や、子どものエンパワーメントや自尊心の回復を目指すという点において、現代社会で普遍的に応用されうるものである⁷。

「アンデルセン式学習法」は、すでに国際的な注目を集め始めている。アンデルセン博物館は、リニューアル・オープンしてまもない 2022 年にヨーロッパ・ミュージアム・アカデミー（European Museum Academy）が主催する DASA 賞⁸を受賞した。プレスリリース⁹において、DASA 賞の審査員たちはアンデルセン博物館の魅力に溢れた建築、展示、学習プログラムの特徴を紹介しながら選出の理由を述べた。

「アンデルセン博物館の」教育的で教訓的なアプローチは、創造的な物語を展開させる上で、すべての子どもたちに自分自身の声を与えるというエンパワーメントを重視している。ツアーとプログラムは、さまざまな創造的エネルギーを刺激し、すべての感覚に訴え、環境やジェンダーの問題など、現実の社会とその問題に数多く言及するように巧みに計画されている。[...] 多様で

⁶ アンデルセン博物館の“学びの宇宙”は、かつてアンデルセン博物館に併設されていたカルチャーハウスである“火うち箱”（*Fyrtojet*）の流れをくむ、教育部門“ヴィル・ヴァウ”（*Ville Vau*）の一部である。したがって、“学びの宇宙”は前身のスキルやノウハウを今日の学習プログラムに存分に活用している（H.C. Andersen Information）。

⁷ したがって、アンデルセン自身が「アンデルセン式学習法」について定義したわけではないことには、注意が必要である。また、日本においてアンデルセンは童話作家としてのイメージが強く、その作品も子どものものと考えられていることが多い。その一方で、デンマークでは詩人として知られており、彼のおとぎ話は子どもも大人も楽しむことができる、複雑で芸術性の高いものとして捉えられている。「アンデルセン式学習法」を検討する際には、このデンマークにおけるアンデルセンやアンデルセン作品像を念頭に置くべきである。

⁸ DASA 賞は、教育と展示を最もうまく組み合わせた博物館にヨーロッパ・ミュージアム・アカデミー（European Museum Academy）が授与する賞である。

⁹ European Museum Academy (2022)

多面的な教育プログラムは、若者が創造力の力を発見し、それを表現力豊かな言語に変換し、成熟し自信に満ちた人間になる力を与える。これは大人が多くを学ぶことができるロールモデルである。

(European Museum Academy 2022: 17)

このコメントには、アンデルセン博物館の学芸員たちが長年にわたって取り組んできた、「アンデルセン式学習法」に基づく教育の特徴が示唆されている。

4. 「アンデルセン式学習法」の分析－理論的・方法論的背景

“学びの宇宙”は、自身の web サイトにおいて学習ドグマを宣言している。まずはその概要を示すべく、“学びの宇宙”が公開している理論的・方法論的基盤の全体像を簡単に図表によって示しておく。なお、表中の「参考文献」は、「アンデルセン式学習法」構築のための参考文献としてアンデルセン博物館によって提示されているものである。

表2 “学びの宇宙”の理論的・方法論的基盤の構造¹⁰

	“学びの宇宙”の理論的・方法論的基盤				
分類	特にアンデルセンの技法や思想に根差したもの		子どもたちと共創するための理論や方法論		
項目	①アンデルセンの芸術的技法	②遊びと子どもの文化	③子どもたちとの共創	④オープン・クエスチョニング・マインドセット (OQM)	⑤討論演劇と即興演劇
参考文献	Bøggild og Lübker (2020)	Toft og Knudsen (2016), Drotner (2006)	Tanggaard og Dilling (2019)	Worley (2006)	-

以下では、表2に示した「アンデルセン式学習法」の構造を説明しうる“学びの宇宙”の理論的・方法論的基盤について、ひとつずつ確認する。

(1) アンデルセンの芸術的技法

“学びの宇宙”の理論的・方法論的基盤は、Bøggild og Lübker の研究¹¹に依拠している。Jacob Bøggild は南デンマーク大学のアンデルセン・センターの准教授であり、アンデルセンやケルケゴールをはじめとしたデンマーク国内外の文学研究に携わっている。Henrik Lübker はアンデルセン博物館の元学芸員であり、アンデルセン博物館のリニューアル時にはクリエイティブディレクターとしてプロ

¹⁰ “学びの宇宙”の web ページを基に筆者が情報を整理し作成した。

¹¹ Bøggild og Lübker (2020)

ジェクトを主導した。このことから、「アンデルセン式学習法」の開発に文学研究による知見が寄与してきたことが明らかである。

Bøggild og Lübker (2020) は、アンデルセンのおとぎ話を題材に、技法、物語の形式、文体を含むアンデルセン作品にみられる特徴をまとめている。この特徴は「視点で遊ぶ」、「タイトルの繰り返し」、「言葉遊び」、「口述性」、「ロマンティック・アイロニー」、「控えめな演出」、「語り手の位置で遊ぶ」、「答えのないおとぎ話」と8つのポイント¹²に分けて表現されており、各々についてアンデルセン作品とその該当する部分を引用しつつ文学的な観点から論じられている。そして、アンデルセン作品が読者に共感をもたらしつつ共感から引き離す役割を持っていること、すなわちアンデルセン作品の持つテキストの「二重性」を主張の要点としている。この二重性により読者は、アンデルセン作品を単純な道徳によって解釈しようとする試みを阻まれるのである。その代わりに、読者は世界に存在することの哲学的な問いを得るが、この問いにテキスト自身が答えることはほとんどない。そのため読者自身がそれぞれのコストとリスクを負って、その問いを独自に解決していかなければならないとまとめている。

Bøggild og Lübker (2020) はアンデルセン作品にみられる特徴として前述した8つのキーワードを挙げているが、これらは完全に独立しているのではなく、相互に複雑に関与しあっている。それらを簡潔にまとめると、以下のようになる。

- アンデルセンのおとぎ話には明確な答えや永遠の真理が存在せず、一見すると無邪気で安全なおとぎ話の水面下に潜むものを認識しなくてはならないのは読者自身であるため、読者の解釈作業が肝要である（「控えめな演出」、「答えのないおとぎ話」）。
- アンデルセンは視点、語り手、語りの位置を実験的に変化させており、動物や物が声を持つといった魔法的な要素がありながらも、多くの点で現実的で認識可能な世界が成立している。一方で、異なる語りの立場を行き来する語り口によって、語り手と物語が前景化し、読者の物語への共感が損なわれる（「視点で遊ぶ」、「語り手の位置で遊ぶ」）。
- アンデルセンの文体は口述性を特徴としており、子どもと同じ目線で語りながら、今ここで物語が作られているという同時性と臨場感を与える（「口述性」）。
- アンデルセンは、現実とファンタジーの世界との境界を曖昧なものにしている。その例としては、語り手として物語自身についてコメントをすることや、

¹² “Leg med perspektiver”, “Gentagelse af titel”, “Ordspil”, “Mundtlighed”, “Det underspillede”, “Romantisk ironi”, “Leg med fortællerpositionen”, “Eventyr uden svar”

日常生活で何気なく使われている慣用句や定型句を物語内で使用することが挙げられる（「タイトルの繰り返し」、「言葉遊び」、「ロマンティック・アイロニー」）。

(2) 遊びと子どもの文化

アンデルセン以前の時代には、「善悪の判断がつかず、あいまいで複雑な芸術を理解できない子ども」像が存在し、大人は彼らを正しく道徳的な情報で満たしてやるべきだと考えられていた。しかし、アンデルセンは子どもたちが複雑で、感覚的で、活動的であり、大人が彼らから多くを学べるような存在であることを示した¹³。

アンデルセンが新しく型破りな世界観に夢中になっていた¹⁴ように、“学びの宇宙”は子どもたちが自身の考えや解釈を表現することを恐れない対話的な空間を作るように心がけている。ただし、これは伝統的な知識の共有やおとぎ話の語り聞かせを全く無くすということではなく、これらの伝統的な教授法をとる時間と、対話的で共創する時間を明確に分けて子どもたちに提供するのである。この「語りを聴く」と「参加する」役割を交替させるという構造は、アンデルセン自身がおとぎ話で用いた概念でもある。

(3) その他の理論的・方法論的基盤

その他の“学びの宇宙”における実践の理論的・方法論的基盤は、いずれも子どもたちが「アンデルセン式学習法」を用いて学習する際の円滑な学習、創造性、批判的思考を促進させるための教授法やツールを提供する。

「子どもたちとの共創」では、子どもたちやその親と協力して新しい取り組みが開発されたり現在のプログラムが調整されたりするほか、個々のプログラムにおいても「子どもたちが共感し、考察し、解釈することで貢献して初めて、その体験が完成する」との考えが共有されている。「オープン・クエスチョニング・マインドセット（OQM）」は子どもたちをさまざまな話題や概念、物語に引き込むための教授法・思考法であり、子どもたちが気持ちよく貢献できるような場を素早く作るための、オープンで魅力的な質問と会話のテクニックをファシリテーター

¹³ Küllerich (2023)。例えば、アンデルセンの『はだかの王様』において王様が裸であるという真実をはじめに指摘したのは、ほかでもない子どもであった。このように、主人公が道徳的でないこともあるアンデルセン童話では、物語の中で最も貴重な示唆を与える役割を子どもたちが担うものも少なくはない。

¹⁴ アンデルセンの「型破り」な性質は、彼のエピソードや作風によく表れている。例えば、蒸気機関車が新しく珍しいものであった時代に南欧や中東を含め数多くの国や地域を旅してまわったこと、また文学テキストに口語体を取り入れたことなど、枚挙にいとまがない。

や教師に提供する。「討論演劇と即興演劇」では、語り聞かせ、討論演劇、即興演劇に関する豊富な経験を活かし、ファシリテーターが生き生きとした語りでアンデルセン童話の奥深くに子どもたちを連れて行き、彼らの童話に対する新たな視点や遊び心あふれるアプローチを歓迎する。

5. 「アンデルセン式学習法」を用いた実践

アンデルセン博物館が所属する博物館組織であるオーゼンセ博物館（Museum Odense）は、自身の Web サイトにて提供する学習プログラムの情報や教員に向けた指導用ガイドを公開している。本章では日本でいう保育園から大人までを対象とした様々な学習プログラムのうち、初等教育と中等教育に向けたプログラムを各段階において二つずつ選択のうえ比較した。それらのプログラムの情報を表にまとめると、以下のようになる。

表3 アンデルセン博物館で提供される学習プログラムの例¹⁵

	ヴィル・ヴァウの 演劇コース Teaterforløb i Ville Vau	新しく、古いおとぎ話 Nye, gamle eventyr	アンデルセンの視点 Andersens perspektiv	アンデルセンが消える！ Andersen forsvinder!
教育段階	初等教育		中等教育	
学年	1～3年生 ／4～6年生	4～6年生	7～10年生	高校生
時間	1／1.5／2時間	2時間	1／1.5／2時間	1時間
最大人数(人)	30	30	30	30
価格 (デンマーククローネ)	550／750／900	900	550／750／900	550
テーマ	デンマーク語 演劇	デンマーク語	デンマーク語 演劇	デンマーク語
内容の要約 (筆者による)	アンデルセンと同じ想像力豊かな方法で、新しいおとぎ話を即興劇として創り出す。	アンデルセンが古い民話や昔話に基づいておとぎ話を創ったその方法で、自身自身の物語を創り出す。	アンデルセンと同様に、複数の他者の視点から世界を探索する。	アンデルセンから出発して、自己認識や自己表現について考える。

以下では、表3に挙げた学習プログラムの内容について教育段階ごとに内容を概観し、その特徴から「アンデルセン式学習法」がいかに教育実践に活用されるのかを考察する。

(1) 初等教育段階向けのプログラム

表3に挙げた「ヴィル・ヴァウの演劇コース」¹⁶と「新しく、古いおとぎ話」の

¹⁵ オーゼンセ博物館のウェブサイトにて公開されている各種プログラムの情報を元に、筆者が作成した。なお、同じ教育段階向けに複数のプログラムが提供されている場合は、構成や内容の観点から比較して、なるべく形態が近いものを抽出した。

¹⁶ このプログラムの様子は、オーゼンセ博物館の公式 Youtube チャンネルの 2022 年 9 月公開の動画にて紹介されている。(https://youtu.be/uWoFN5BntUo?si=bgiJe6_ZuPTwYoYB)

プログラムには、大まかな展開が共通している。いずれのプログラムでも、児童はまずファシリテーターからアンデルセンの物語を語り聞かされ、物語の世界へと誘われる。児童は、アンデルセンがどのようにしてそれらの物語を創作したのかについて、対話やアクティビティによって理解を深める。そして、その方法を用いて自分のオリジナルのおとぎ話を創作する。

総括すると、初等教育向けのプログラムは ①アンデルセンの創作方法を学び、②その手法に倣って自身の物語を表現できるようになる ためのものである。ここには、アンデルセンの芸術的技法を児童に身に付けさせ、自身の芸術的ツールとして活用できるようにするという意味での「アンデルセン式学習法」がみられる。

(2) 中等教育段階向けのプログラム

一方で、中等教育向けのプログラム「アンデルセンの視点」と「アンデルセンが消える！」では、指導用ガイドにて紹介されるプログラムの説明が抽象性を増し、プログラム内で扱われる内容もより高度なものとなる。生徒は、アンデルセンの特徴である「多様な視点による創作」や「アンデルセン像の普遍性と特殊性」に端を発し、おとぎ話に関する哲学的な対話から「虚栄心」「貪欲さ」「他人の目」「自己表現」といった概念に関する現実的な課題へと思考を深めていく。

中等教育段階では、アンデルセン作品や彼の創作の姿勢を出発点に、現代社会の問題や実存的課題に結び付いた哲学的テーマへと展開する。したがって、中等教育向けのプログラムは「アンデルセン式学習法」によって生徒の人生哲学を問い直しているといえ、これは芸術的ツールをもたらすのとは目的や方向性が異なるものである。

6. 「アンデルセン式学習法」の解釈と今後の展開の可能性

「アンデルセン式学習法」は今なお進化を続けている研究方法であり、かつ実践方法でもある。そのため、その全容を掴むことは容易なことではない。本章では、参加者にもたらされる体験に注目して「アンデルセン式学習法」にみられる理念や特徴を分析したのちに、「アンデルセン式学習法」の暫定的な課題と今後への期待について検討したい。

6.1. 「アンデルセン式学習法」の理念や特徴の分析

(1) 子どもへの信頼と尊重

「アンデルセン式学習法」の根幹には、子どもの力への信頼、そして子ども一人一人に対する尊重の姿勢がある。それは、アンデルセンの作品のような複雑で

難解な芸術を子どもが理解することができる信じることと、「何を話しても聞いてもらえる」と子どもが感じられるような対話の場を形成することである。これらは教育学的方法論だけではなくアンデルセンの芸術的な技法にも由来している¹⁷。すなわち、アンデルセンが作中において重要な役割を子どもたちに担わせたように、あるいはアンデルセンが読者を信頼して答えのない哲学的問いを投げかけたように、教育の場において大人は子どもたちを信頼するべきであり、大人の期待する答えを待つのではなく、対話によって共に答えを探していく姿勢が求められるというのである。

(2) マルチモーダル・アプローチによる学び

「アンデルセン式学習法」のもう一つのポイントは、子どもたちが自分にとって適切で魅力的な方法によって体験し表現しながら学ぶことである。これは、前述の「遊びと子どもの文化」という理論的基盤や、「子どもの尊重」という観点とも呼応するものである。

「アンデルセン式学習法」は、アンデルセン自身の姿勢、すなわち表現方法にとらわれない自由で多様なメディアを活用した創作活動や新奇なものへの関心、あらゆる読者に語りかける語り口を、現代の教育活動に落とし込むことで成立してきた。アンデルセンの世界観や想像力を探求すること、またアンデルセンのような作品をつくりたい、メディアやテクノロジーがもたらす新しい表現の可能性を活かしたいと願うことこそが、「アンデルセン式学習法」に通じるのである。

この学び方はアンデルセン博物館全体を通して展開されている。博物館の様々な形式の芸術を用いた展示や、“ヴィル・ヴァウ”の多数の衣装や小道具を含む舞台装置はまさにこの点を反映して設計されている。アトリエも、切り絵や作文、お絵かきなどの好きな表現方法を選んで創作に没頭できることが宣伝されている。さらに、アンデルセンの家などの関連する場所を実際に訪れながら学習することも「アンデルセン式学習法」のひとつとされており¹⁸、これはオーゼンセというアンデルセンに縁のある土地に位置するからこそ可能となる、アンデルセン博物館独自の強みである。

(3) 教育の主題にも、学習のツールにもなるアンデルセン

「アンデルセン式学習法」のユニークな特徴の一つが、「アンデルセン式学習法」におけるアンデルセンの多様な用いられ方である。

「アンデルセン式学習法」がアンデルセンに関する単なる知識の習得にとどま

¹⁷ Küllerich (2023)

¹⁸ Mogensen (2019)

らないものであることは、この学習法を説明する「アンデルセンについて話すだけでなく、アンデルセンのように話す」という言葉¹⁹に端的に表現されている。本稿が取り上げた初等教育向けのプログラムでも見られたように、子どもたちはアンデルセンが用いた特有の芸術的技法や彼の生涯について学ぶだけでなく、アンデルセンの芸術的技法を自分なりに咀嚼してコミュニケーションや創作に用いてみるのである。

また、「アンデルセン式学習法」の活躍の場は、アンデルセンについての学習に限られない。むしろ、中等教育向けのプログラムにおいてアンデルセンにまつわる知識は出発点でしかなく、その主題は生徒の生活と密接した哲学的問いであった。このように、「アンデルセン式学習法」はアンデルセンに関する学習に限らず、普遍的に活用される可能性を秘めている。

アンデルセン博物館は、近年一貫して従来のアンデルセン像からの転換を図ろうとしている。このことは、博物館全体のコンセプトや、アンデルセン博物館が監修した新しいアンデルセンの伝記絵本²⁰にも通底している。「アンデルセン式学習法」もまた、アンデルセン博物館が世界に発信していきたいそのような新たなアンデルセン像のひとつであるのかもしれない。

(4) 参加者をエンパワーメントし、自信を取り戻させる

以上のような「アンデルセン式学習法」の理念や特徴によって、子どもたちはアンデルセンにまつわる知識を得るのみならず、信頼と安心感の中で対話的に学ぶことで、自身のコミュニケーション価値と自尊心を認識できるようになる。3章にて DASA の審査員らの声明をまとめた通り、また中等教育向けのプログラムでその高度な展開の可能性が確認できた通り、「アンデルセン式学習法」は大人にも活用が期待されるエンパワーメントモデルでもある。

6.2. 「アンデルセン式学習法」のさらなる展開への期待と課題

(1) 課題：未完成な開発と検証

アンデルセン博物館の「アンデルセン式学習法」が抱える課題は、この学習法が未だ開発の途上にあることである。これまでにみてきたように、「アンデルセン式学習法」は普遍性をもって展開を続けていく可能性を秘めており、日本をはじめとした諸外国や他の教育現場でも広く活用できることが期待されているにもかかわらず、現状のままではその段階に遠く及ばないと言わざるを得ない。「アンデ

¹⁹ Küllerich (2023)

²⁰ Aakeson og Kjær (2022). 背表紙の「アンデルセンは多くのことを語ってきたが、今度は彼についてたくさん語るとき」という言葉によって、この伝記絵本がそれまでのアンデルセンの絵本とは異なるものを目指して作られていることが示唆される。

ルセン式学習法」が今後も発展を続けていくためには、

- ① アンデルセン博物館の実践を対象にした、「アンデルセン式学習法」が何たるかの定義や分析、その効果の検証や批判的考察の結果が集まること
- ② その知見を発展させて、様々な教育現場や学習者を対象にこの学習法の普遍的な活用可能性を検証すること

の2つの段階を経て研究が進められる必要があろう。

(2) 期待：分野を超えた協働の土壌

一方で、「アンデルセン式学習法」が有する分野を超えた協働の土壌は、今後さらなる研究がなされていく際の大きな強みとなりうる。実際に、「現代にアンデルセンを用いて教える」際に異分野の協働が不可欠なものであることは、多くのアンデルセン研究者が共通して認識している点であり²¹、それゆえに本稿冒頭で紹介したような多様な専門分野の研究者の論考を集めた特集が組まれてきた。

「アンデルセン式学習法」の開発の背景を振り返ると、文学や教育学などの様々な研究分野、および多様な実践形態の協働が欠かせないものであった。また、知識の伝達に特化した伝統的なアプローチと対話的なアプローチを調和させることで、デンマーク語や芸術といった学校科目の目的に沿った教育を目指すという側面²²も忘れてはいなかった。さらに、「アンデルセン式学習法」の実践中には、参加者はファシリテーターや子どもといった自身の立場の違いを超えて対話したり、表現方法の垣根を越えて共創したりするように求められる。

したがって、「アンデルセン式学習法」の今後の展望には、アンデルセン教育研究の潮流とも合致したこの「協働」の強みを活かして、いかに外部と連携して展開できるかが鍵となるだろう。アンデルセン博物館はDASA賞受賞をきっかけに新たな国際的繋がりを獲得しており、今後は博物館同士のコラボレーションを起点にさらなるグローバルな相互作用が期待されている²³というが、今後は国内外の学校や研究者とも協働し、新たな視点で「アンデルセン式学習法」を分析・検証することが期待される。

7. おわりに

アンデルセンの作品、芸術技法、人生を基に開発されてきた「アンデルセン式学習法」は、アンデルセンや彼の作品の性質を広く受け継いだものでありながら、

²¹ 特にこの点を中心的に取り上げた論考に、Knudsen (2018)がある。

²² デンマークの学校教科の目的に対応するという観点は、*Læringsuniverset* のドグマの一つとして掲げられている。

²³ Birkelund (2023)

その普遍性をもってさらに発展を続けていく可能性を秘めている。本稿では、アンデルセン博物館による「アンデルセン式学習法」に関する事柄のうち、理論・方法論・理念といった背景事情のほか、“ヴィル・ヴァウ”や“学びの宇宙”といった教育部門による現行かつ特定のプログラムに着目してきた。これらの理論的背景や実践と「アンデルセン式学習法」との関わりについては概観することができたが、本稿が提示した「『アンデルセン式学習法』はアンデルセン博物館全体によって活用されているのではないか」という仮説には、大いに検証の余地が残された。

アンデルセン博物館による「アンデルセン式学習法」の研究と実践の様相をより詳しく体系的に検討するためには、本稿にて扱いきれなかったアンデルセン博物館のその他の教育的機能、すなわち展示や企画、そして新たな学習プログラムにも目を向ける必要がある。また、その際には本稿が依拠してきた文献を基礎とした分析手法だけでなく、現地でのフィールドワークを含めた質的な分析の導入が、さらなる研究の発展のために求められる。

Nuværende situation og udfordringer i udviklingen af ‘den Andersenske metode’ ved H.C. Andersens Hus

– Fra H.C. Andersens oprindelige kunstneriske teknik
til en universel og anvendelig læringsmetode –

Resumé

Naho Kukita

Anvendelsen af H.C. Andersen og hans arbejde i moderne uddannelse har for nylig tiltrukket sig betydelig interesse fra forskere. Denne artikel undersøger specifikt ‘den Andersenske metode’ som et centralt fokus. H.C. Andersens Hus har udviklet denne metode gennem pædagogisk praksis baseret på H.C. Andersens originale kunstneriske teknikker og andre pædagogiske teorier. Metoden omfatter kvaliteter som ‘dobbeltthed’ og ‘tvetydighed’ i Andersens arbejde, og den har også potentiale til at blive anvendt bredere på tværs af forskellige områder. Denne artikel har til formål at undersøge ‘den Andersenske metode’ ved at udforske dens teoretiske grundlag, herunder en analyse af specifikke læringsprogrammer, der demonstrerer dens implementering. For at videreudvikle denne undersøgelse er det nødvendigt med forskning fra nye perspektiver, såsom feltarbejde, der er målrettet museets udstillinger og læringsprogrammer.

参考文献

- Aakeson, Kim Fupz, & Signe Kjær. 2022. *Hans Christian Andersen: et liv med modgang, medgang og en masse eventyr*. 1. udgave. København: Carlsen.
- Aktualitet. 2019. *Aktualitet - Litteratur, kultur og medier: Hans Christian Andersen in communities*, 14 (2).
- Bøggild, Jacob & Anne Klara Bom. 2020. “H.C. Andersens univers,” *Aktualitet - Litteratur, kultur og medier*, 14 (2), 10-14.
- Bøggild, Jacobog & Henrik Lübker. 2020. “H.C. Andersens metode,” *Aktualitet - Litteratur, kultur og Medier*, 14 (2), 4-9.
- Center for Børnelitteratur. 2004. *Det er ganske vist- Læreren bog om H.C. Andersen*. 1. udgave. København: Roskilde Universitetsforlag.
- European Museum Academy. 2022. *2022 EUROPEAN MUSEUM ACADEMY AWARDS - The Judges' Report*.

- Forum for World Literature Studies. 2018. *Forum for World Literature Studies*, 10 (1), 1-107.
- Kanonudvalget. 2004. *Dansk litteraturs kanon: Rapport fra Kanonudvalget*. Undervisningsministeriet.
- Knudsen, Karin Esmann. 2018. “Hans Christian Andersen for Children, with Children, and by children”, *Forum for World Literature Studies*, 10 (1), 1-8.
- Læringsuniverset. n.d. *Læringsprofil i det ny H.C. Andersens Hus*.
- Birkelund, Malene. 2023. “Det vigtigste er, at børnene føler, at de er gode til at gå på museum”, *Magasinet MUSEUM*. (<https://www.magasinetmuseum.dk/det-vigtigste-er-at-boernene-foeler-at-de-er-gode-til-at-gaa-paa-museum/>, 2024.9.13 アクセス)
- Bjørnsten, Lars. “Ville vau vau vau, ville vo vo vo, vite hu!”, *H.C. Andersen Information*. (https://www.hcandersen-homepage.dk/?page_id=101314, 2024.9.13 アクセス)
- DASA Arbeitswelt Ausstellung. (<https://www.dasa-dortmund.de/>, 2024.9.13 アクセス)
- Kiilerich, Mette. 2023. “H.C. Andersen giver børn selvtiliden tilbage”, *Politiken*. (<https://politiken.dk/debat/kroniken/art9215273>, 2024.9.13 アクセス)
- Læringsuniverset. “Alle undervisningsforløbene er bygget op omkring fire dogmer, *H.C. Andersens Hus*”. (<https://hcandersenshus.dk/laeringsuniverset/>, 2024.9.13 アクセス)
- Læringsuniverset. “Teoretisk og metodisk grundlag”, *H.C. Andersens Hus*. (<https://hcandersenshus.dk/laeringsuniverset/>, 2024.9.13 アクセス)
- Mogensen, Mette Stauersbøl. 2019. “H.C. Andersen i undervisningen – med forfatteren som undervisningsemne og -metode”, *Museum Odense*. (<https://museumodense.dk/artikler/h-c-andersen-i-undervisningen/>, 2024.9.13 アクセス)
- Museum Odense. “For grundskolen - Oplev eventyret i Læringsuniverset i H.C. Andersens Hus”, *youtube*. (https://youtu.be/uWoFN5BntUo?si=bgjJe6_ZuPTwYoYB, 2024.9.13 アクセス)
- Museum Odense. “Undervisning”, *museumodense.dk*. (<https://museumodense.dk/undervisning/>, 2024.9.13 アクセス)
- Skoletjenesten, “H.C. Andersens Hus”, *skoletjenesten.dk*. (<https://www.skoletjenesten.dk/hc-andersens-hus>, 2024.9.13 アクセス)